

奇跡は、起こる ～新春に夢をふくらませて～

桜の花がほころび、進学に就職にと夢がふくらむ季節です。

劇的でした。奇跡かと思われる人生的一幕が演じられたのです。この日の私のセカンドオペニオン外来を訪ねてきたのは、60歳代の主婦。本人の容態があまりにも悪いため、兄弟親族がそろっての来院でした。

病名は「非アルコール性脂肪肝炎 (NASH)」。腹水で満たされたお腹は、出産まじかかと思わず腹囲。履ける靴がない。最大級の島草履が申し訳なさそうに見えるほどに腫れあがった下肢。肝硬変の終末期像である。

一刻の猶予もない。母校の大学病院の肝移植グループに連絡を取った。家族に、臓器提供者 (ドナー) の選別を指示した。予定の外来受診日の前日に、事態は急展開。宿泊のホテルで急変、救急車で搬送となった。

大学病院の若い女性の移植コーディネーターの素早い対応は見事でした。病状の説明、移植の心得、手続き、そしてドナーへの心くばり。全身の管理の後、約1ヵ月後の生体肝移植となった。

手術記録からみた手技は、まさに芸術、匠の技でした。肝硬変。静脈瘤。腹水。困難が予測される生体肝移植は約8時間で完遂された。

「石の上にも三年」。スポーツ、絵画、陶芸、建築。すべての場面での磨き抜かれた匠の技は、「美」そのものかも知れない。外科医の世界にも、芸術は存在した。

移植から約一年が経過した。何度かの拒絶反応も、無難に乗り越えられた。患者さんのつぶやきの一言に、地球よりも重い「命」の意味が込められていた。「今、生きていることが・・・うれしい」と。

執刀した教授の、若い世代の医師への講演・訓辞を聴く機会に恵まれた。「医学の世界には、奇跡という言葉は存在しない。しかし、移植の医療には奇跡的なことが起こる。信じて、追い求めなさい。切磋・琢磨」。

かつて、「少年よ、大志を抱け」と北海道の大地で叫んだ札幌農学校のクラーク博士も、南の島の若者に向かって呼びかけている。「石の上には、十年」。「夢を求めて、努力しなさい」。「奇跡は、起こり得る」。